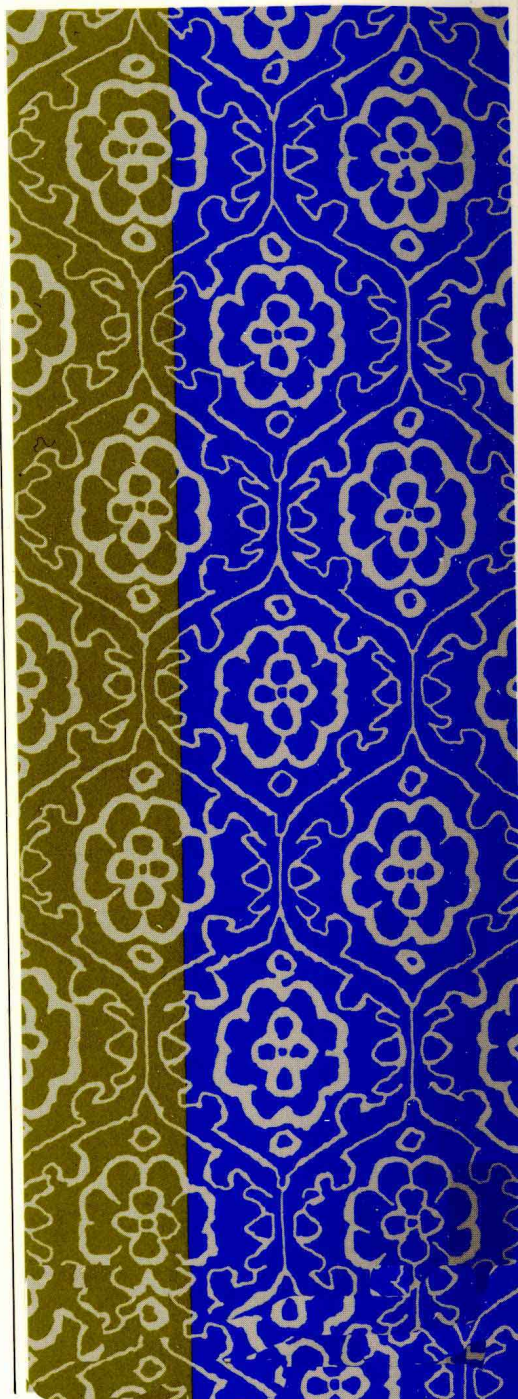


冥想と経験

Tamaki Koshiro

玉城康四郎

春秋社



冥想と経験



玉成康四郎

春秋社

著者略歴

1915年、熊本県に生まれる。東京大学文学部印哲
梵文学科卒。東京大学名誉教授，文学博士。

1999年逝去。

著書に、『心把握の展開』『信仰の実証』『新しい
仏教の探求』『無量寿経 永遠のいのち』『仏道探
究』など多数。

冥想と経験

一九七三年三月二〇日 初 版第一刷発行

二〇〇四年六月一〇日 新装版第一刷発行

著 者 玉城康四郎

発行者 神田 明

発行所 株式会社春秋社

東京都千代田区外神田二一六六（☎101-0011）

電話03-5561-6121 振替00160-6-16661

<http://www.shunjusha.co.jp/>

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

装丁 本田 進

定価はカバー等に表示してあります

2004 © ISBN 4-393-13518-0

如来において

永遠に

冥想する

如来は

冥想の

生命である

不可思議なる光

かつてやぶれることのない

厚い厚い疑惑の壁を

うち抜いて噴きいずる

聞光力よ

この光 この力こそ

劫初より 求めに求めぬいて

身をくだき

骨をけずり

ついに黒闇の奈落に

踏みおちんとして

いかばかりたゆたえるか

こみあげてくる

絶望と悲惨との

あわれなる生命の苦汁に

頭蓋はきしんで音をたてても

脳髄は摩擦して裂けんとしても

頑強に地底に根づく自我の根源

それは物か 怪奇か

無明か はた不可滲透なるか

永遠の劫火

瞬間の裂震

わたしはその時を知らない

わたしはその暗転を覚えない

鬱蒼としげる煩惱の樹木の

葉脈のひとすじひとすじに

地中に蟠踞する醜惡なる

自我の根元に

ひそやかにしみ入る

不可思議の光

天地のすがた

宇宙のたたずまい

森敵として

全身の眼を見張る

目

次

第一章 冥想と経験……………1

一 冥想 3

二 冥想への道 9

三 経験としての空 16

四 信仰と冥想 28

五 行と冥想 39

六 信仰と経験 49

七 宗教書の遍歴 53

第二章 ヨーロッパでの経験……………57

一 ヨーロッパの仏教者 59

フンガーライダー氏 59

シュテীগマン夫妻 61

ブレムスマ氏 64

デュルクハイム教授 66

グンデルト教授 69

二 異教徒の感覺 71

ドイツ人氣質 71

ボイロンの修道院 73

キリスト教への問い 76

十字架 79

写真性 81

外向と内向 84

マルツイ夫人の演奏 86

第三章 分からないもの…………… 87

一 恐るべき無智 89

二 表現の表と裏 91

三 必然と自由 94

四 世界の始まりと行方 96

五 死後 99

第四章 釈尊の誕生……………109

一 天にも地にもただひとり……………111

二 釈尊の前身……………114

三 釈尊の誕生と現代人の光……………122

四 大我と我執……………134

第五章 諸祖礼讃……………151

一 空海の世界観……………153

二 法然の実存……………168

三 釈尊と親鸞……………193

四 道元と現代……………209

あとがき……………225

第一章

冥想と経験

一 冥想

1

わたしはいま冥想を生活の根本に考えている。

冥想は、目をつぶって静かに想うことであり、中国のことばであるが、インド仏教の静慮 *dhyaṇa* とよく似ている。『莊子』列御寇に、

「至人は精神を無始に帰し、無何有之郷に甘冥す。」

とあり、また、支遁の詩に、

「追液して空無に帰す。無や復た何ぞ傷まん。万殊、一塗に帰す。道会して冥想を貴ぶ。罔象、玄珠を掇う。」

とある。

罔象というのは、実は『莊子』にでくる象罔のことで、黄帝が赤水に遊んで、帰りぎわに玄珠を落したとき、三人のものに命じてそれぞれ探させたが得られず、最後に象罔は無心になって探しあてた、という。郭象は、このところを、

「象罔これを得たり。明かに真を得る者は、心を用うるに非ざるなり。象罔は即ち真なり。」と注している。

それはともかくとして、わたしはわたし流に、冥想を、冥合して想う、と受けとっている。何に冥合するか、またどのように冥合するかということが、冥想の中心主題になるのであるが、簡単には述べきれない。また、想う、という字であるが、専門の学者によれば、相手に向って心がひかれる意、と解されている。わたしはこの解釈に共感している。自分が想うにはちがいないのであるが、それに引かれて想われる、というのが實際で、ついには逆に、そのものから自分が想われる、という境にまできわまる。

冥想というのは、わたしにとって総合的なことばである。いろいろな想い方を総合した普遍的な意味をになっている。どんな想い方があるか。

たとえば坐想である。これは坐して想うことである。坐禪に同じい。しかし坐禪といえ、今日ではすぐに禪宗を連想するが、坐禪は、釈尊以来、仏教で伝統的に行なわれてきたものであり、またインド思想ではヨーガとして、これも広く行なわれている。これが冥想の根幹となるものである。しかし問題は坐禪の形ではなくて、その内容である。それこそ死命を制するところである。

また行想というのがある。わたしのつけた名で、仕方がないからそう呼んでいるが、坐想や、このあとで述べる想を除いた、あらゆる場合の想である。行住坐臥の行よりもひろい。いつでも、どこでも想うことである。地下鉄のなかで冥想する。地下鉄はうす暗いので、視力の弱いわたしには字が読

みにくい。冥想するよりほかにない。隅の席があればなおよろしい。安心して冥想を楽しむことができる。時には乗りすごしたり、とんでもない所で下りることもあるが、危険はない。

つぎは臥想である。床に臥したままで想うことである。夜、床に入って寝につく。そのときは一日の疲れが出ていますので、あまり臥想のゆとりはない。しずかに想いながら、間もなく眠りに入る。目指すのは、その翌朝である。目覚めた刹那は、波しずかなること鏡のごとし、その瞬間に臥想に入る。もう何もいうことはない。そのまま冥合の世界に引き入れられる。ウパニシャッドに、アーナンダ・マヤ・アートマン（歓喜より成るアートマン）という語がある。アートマンそのままが歓喜である。ここは無時間である。

また、睡想というのがある。眠りのままで冥想する。これはむずかしいといえ、むずかしい。しかし眠りにまかすほかはないから、手のほどこしやうがないともいえる。だんだん気づいてきたことは、朝、目覚めた瞬間と、逆にさかのぼって、夜、眠りに入る瞬間とをつなぐと、その一線が睡時になるのだが、わたしは時折り、目覚めた刹那に睡想から浮び上ってきたことを実感する。そして眠りの一線をたどって、寝につくときの刹那にまで考慮をめぐらすと、睡想の種は、どうもその時の臥想に因しているようである。わたしにはまだ睡想の機構がほとんど分かっていない。ただ予感にすぎないのだが、身も心もぐっすり眠るのが、睡想の根源態のような気がする。ラディカルに言えば、宿業そのものが安んじて眠るのである。精神の平安と身体との融け合った源泉が睡想にあるような気がしてならない。

このように、想にはいろいろな仕方が数えられるが、それらを綜合して冥想と名づけたと思う。

2

さて、その冥想の意味・特徴であるが、これは哲学的にはまったく解明されていない。インドのヨーガは、ヴィヴェーカーナンダによつてきわめてあざやかに、オーロビンドによつていとも彫りふかく、組織的に哲学的に解明され、大きな業績があがつている。冥想についても、現代人の理解のなかに投入して、その渦のなから新たに考えなおす必要があると思うのだが、わたしにはそうした能力はないし、また冥想一般にはあまり興味がでない。ただ自分自身の冥想を基盤に、多少なりともこの問題を考えていかねばならぬのではないかと思っている。

むずかしいことは別稿にゆずりたいと思うが、たとえば、ドイツ哲学のカント、フィヒテ、シェリングの一連の流れを考えると、わたしはそのなかに、わたしのいう冥想の意味を照合して、多少でも再考することが可能ではないかと思う。

カントの認識論は感性に出発し、直観や経験を可能ならしめる根源的制約を定立している。それがすなわち先驗的統覚である。冥想においては、まさにこの先驗的統覚そのものが問題なのであるが、カントでは単に意識統一の先驗的根拠となっているにすぎないのであって、もとより究明の対象ではない。しかし、パラロギスムス（誤謬推理）においてカントが自我に関する理性の誤謬を深く洞察していることは、わたしには感無量である。冥想において究めようとする叡智は、カントの理性とはも